

鈴鹿山麓混成博物館フォーラム1

神様が好きですか? 仏様が好きですか?

神仏習合文化を再考する

なにげなくある、神様と仏様が何の違和感もなく溶け合っている姿。

冷静に考えれば、世界にあまり例のない信仰の姿では?

その意味と、力と、そして未来への可能性について考えます。

2019年

鈴鹿山麓混成博物館

鎮守の観音様

カミ様が好きですか？ ホトケ様が好きですか？

NPO法人歴史資源開発機構 大沼芳幸

カミ様と神様

この資料で表現する「カミ」とは、主に自然の中に漂う気配で、祈りの対象とはなるが、必ずしも祈りに応え「恵み」をもたらすとは限らない、模糊とした存在を指す。そして「神」は「カミ」が里に迎えられ、神社という住居を提供され、ここに常在し、より積極的に祈りに応え「恵み」をもたらす存在で、やがて「八幡」「天神」等メジャーな神様に変容した存在を指す。

勧請吊に期待されるもの

湖東・湖南・甲賀の古い集落を歩くと不思議なしめ縄をよく見かける。太い藁縄(主縄)の中央に「トリクグラス」と呼ばれる輪を付け、その左右に多くの場合は12本の「小縄」をぶら下げる。トリクグラスや小縄には常緑の葉がつけられることが多い。(西村泰原著『勧請縄—個性豊かな村境の魔除け—』:サンライズ出版2013年)西村泰郎氏の調査によれば2013年現在、県内に161か所の勧請吊が報告されているが、実際にはもっと多い。この様に多くの勧請吊があるが、その形状はすべて異なり、一つとして同じものはない。

勧請吊の意味については「村への邪悪なモノの侵入を阻止する結界」として説明されるが、私はもっと多様な意味が込められていると考えている。様々な形状がある勧請吊だが一つだけ共通するところがある。それは、トリクグラス、小縄、常緑が省略されることがあっても、主縄は必ずある。そして主縄の先端と末尾の形状が異なることが多く、「頭」「尾」と区別される。つまり勧請吊の本



東近江市能登川 毘沙門堂前の勧請吊

質は頭と尾を持つ長い縄であり、これは「蛇」をかたどったものに他ならない。おそらく、「蛇」に象徴される水神に一年の豊作を祈念する”そんな心象が反映されているのだろう。ともあれ、勧請吊に籠った「モノ」に対し、何らかのご利益を得ようとする心象は、そのご利益が何であれ変わらない。

ところが、勧請吊に御利益を担わせる「者」は大きく二つに分かれる。「神様」と「仏様」である。現在、多くの勧請吊は神社の境内に鳥居とは別に吊るされ、主縄には御幣を立て、或いはその根方に御幣を立てるなど、明らかに神式に祀られている。が、その一方旧能登川町長勝寺のように、寺院門前に架けられ、或いは旧能登川町伊庭の高木観音の場合では、観音堂の前に吊るされる。さらに、旧八日市市市辺西のように、十二光仏の名を前面に記したのものがあるかと思えば、能登川町毘沙門堂前の勧請吊には誇らしげに御幣が立てられる。反対に旧八日市市蛇溝町の長尾神社境内の勧請吊では、トリクグラスの中に十二光仏の札が吊るされる。

本来、神様と仏様は別々の信仰体系の中に位置づけられ、仏教の受容を巡る「聖徳太子VS物部守屋」のように対立的なものであったはずである。しかし、管見に触れた勧請吊の祀りには、神様と仏様の対立関係は微



甲賀市牛飼総社神社



東近江市市原野白鳥神社



甲賀市大河原若宮神社タツノケチ

塵も感じられない。むしろ、神様も仏様も協力しながら人の願いを叶えてあげよう、とする雰囲気すら感じるし、願いを託す人の側も、「願いを叶えてくれるなら神様も仏様も関係ない」みんな「カミ様」といった感性を勧請吊に込めているような気がする。宗教学・歴史的な意味での「神仏習合」とは次元の違う事例かもしれないが、私たちの心の中には間違いなく神と仏が違和感なく同居している。

磨崖仏が語るもの

近江は、石に関する魅力的な文化遺産が多く残されている。そして、その中に「磨崖仏」と呼ばれる一群がある。「磨崖仏」とは、大地に根を下ろした磐に「仏」の姿を刻んだモノである。磨崖仏が刻まれた磐には一定の法則性があるように見える。川や滝の傍、街道の傍に根をおろしている磐。或いは、その磐自身が目立った巨磐であること、などである。これらはおそらく、仏の姿が刻まれなくても、自然信仰（磐座信仰）の対象となっていたであろう磐である。

ここで、「カミ」と「仏」の特性を整理しておこう。「カミ」は気配であるから、姿はなく、言葉も発しない。対して「仏」は、元々、釈迦という人間であったから、仏像という姿を



栗原市駒坂磨崖仏

持ち、経典という言葉も持っている。祈りの対象として両者を比較するならば、より、具体的な祈りの対象、言い換えるならば「祈った感が充実」するのが「仏」である。

「ここに磐がある。ここにカミが宿り、願いを聞いてくれることは判っている。しかし、なんかしら祈った感に乏しい。より具体的にカミに祈りたい。そうだ、磐の中のカミの姿を磐に刻めばよい。困った、カミの姿を見たことがない。そうだ、仏教の神の姿を借りて、磐に宿る神の姿を表そう。地にはえる磐だから[地蔵]にしよう。(或いは、今流行の[阿弥陀]にしよう。)」かくして磨崖仏が誕生する。磨崖仏もまた、「願いを叶えてくれる存在であれば、神様でも仏様で同じ。」という心象の元で生まれた歴史文化遺産なのだろう。



甲賀市瀧の脇不動

親和する心と近江

この感性の根源は、日本人が持っている「森羅万象万物にカミが宿る」というアニミズム的な感性に根差していると考えられる。全てにカミが宿り、各々のカミには個性・特性がある（八百万神）。であれば、神が仏になっても少しも矛盾を感じない。だから、サンタクロースが神になっても構わないし、福祿寿が神になっても構わない。そんな柔軟な心象、言い換えれば様々なモノを「親和」させる「力」を生み出したのが、時として猛威も振るうが、基本的には豊かな恵みをもたらし、人（生き物）の暮らしを支えてくれる、日本の「自然（風土）」なのではないだろうか。「親和する力」は、激変する現代社会の中で、決して失ってはいけない価値観だと思う。

この素敵な神様と仏様の関係を造ったのが、奈良時代から平安時代にかけて「山」に籠り修業をした僧達であり、それを最も鮮明に具現化したのが、比叡山のカミ・琵琶湖のカミの力を借り、天台宗の基礎を造った最澄だったと考える。そしてその延長に現代があり、未来が待っている。

多賀大社の神仏習合

多賀町立博物館 本田 洋

はじめに

多賀大社は、滋賀県犬上郡多賀町に位置し、イザナギ・イザナミ命を祀る寿命の神様として古くから信仰を集めている。中世後期以降、多賀信仰の拡大と勧進活動は、神社の管理を行っていた神宮寺とその配下の同宿輩、坊人らの活動によって支えられていた。明治の神仏分離令により境内に存在した神宮寺は廃され、仏像や仏具は放出されたが、痕跡は今も残る。

神仏習合のはじまり

多賀大社における神仏習合のはじまりがいつ頃なのか定かではないが、矢放神社大般若経に貞応二年(1223)、「田可大社僧永仁」とあり、鎌倉時代には社僧が存在したことが知れる。南北朝時代の多賀大社衆議関係文書には法名を持つ者の署名があり、神社運営に関わっていたと見られている。

多賀大社と不動院

多賀大社の神宮寺の一院であった不動院は、豊臣秀吉の奉加による多賀大社造営の頃より別当と称して運営を掌握するようになった。不動院は明応三年(1494)に六角高頼が多賀豊後守に命じて護摩堂・不動坊舎が建立され、祐尊開基とされる。多賀大社に今も残る天文二十四年(1555)銘の梵鐘は祐尊らの勧進により鑄造され、寄進者には六角義賢、浅井猿夜叉(長

政の幼名)、多賀氏、高宮氏などの近隣の有力者の他、他国の豪族などが名を連ね、広範囲に勧進活動が行われていたことを知ることができる。



多賀大社梵鐘 (県指定有形文化財)

神社の各施設の修理担当を定めた天文十一年(1542)の「多賀大社修理所衆議定書」には、不動坊・観音坊・成就坊・般若坊といった十六世紀後半に定着する四本願が見られ、この頃にはすでに存在していたことが確認できる。不動坊は、本殿・拝殿・舞台など、主要な建物の担当となっており、中心的な役割を担っていたことが推測される。

奥書院(県指定有形文化財)

安永二年(1773)の大火により境内建物は悉く焼失し、すぐに再建に取り掛かれたものの、完全な復興には至らなかった。現在の奥書院は、安永三年頃の建築とされ、不動院に関係し、もともと仏堂的な建物であったものが書院風に改造されている。



多賀大社奥書院

奥書院庭園(名勝)

奥書院に付属する庭で、旧不動院の庭として桃山時代初期頃に造られたと推定されている。池の水は背後に流れる田用水を取り入れており、田用水は芹川の一ノ井から多賀大社を経て高宮へと流れている。江戸時代には芹川の赤田井堰を管理する久徳郷と高宮郷との間で激しい水争いが起こっている。



名勝多賀神社奥書院庭園

多賀社参詣曼荼羅

多賀大社には中世の社頭景観を知ることができる二幅の絵図が伝わり、古本は桃山時代頃、新本は江戸時代初頭頃と見られている。古本には折り跡があり、坊人が持ち歩いて絵解きしたと考えられている。

二幅の構図はよく似ており、古本を例に絵解きを行ってみると、画面左下に表参道の入口高宮の大鳥居、飯盛木を目印に進み、揖取社の前の打籠馬場へ神輿渡御する四月会(馬頭祭)、賑やかな門前町を抜け、そり橋を渡って境内へ、茶屋で一服、庁屋前での弓の神事、的の側には鐘楼・本地堂、拝殿の前の神楽所では巫女神楽、舞台では猿楽、境内を案内するのは山伏の恰好をした坊人、神馬を曳く者、本殿の左の不動院前には重源上人の寿命石、三重塔・般若院・神明両宮・日向社・観音院が並び、日向社拝殿の前の御手洗川では水垢離する者といった、当時のにぎわいが伝わってきて、参拝に訪れたいくなる絵図である。

この絵図の下方には敏満寺と胡宮神社境内が描か

れ、画面右端には大滝神社、主人の危機を救った犬上明神の伝説を描く。小舟に乗る人物は、犬上川を上って源頼朝が当地を訪れ、犬上明神の由来を聞いたという伝承にちなんだものであろう。

本稿の写真は、多賀大社の承諾を得て、多賀町立文化財センター所蔵写真を掲載した。



多賀社参詣曼荼羅 (新本)



多賀社参詣曼荼羅 (古本)

神仏習合像としての神像

滋賀県立安土城考古博物館 山下 立

1. 神とは何か

漢字の「神」は、神を祀る祭卓の形である「示」と、電光が屈折して走る形で、神威のあらわれを示す「申」からなる文字であり、天神（自然神）を意味するという（『字通』）。中国では、在来の神や道教諸神に加え、仏教經典の移入・翻訳に伴い仏教尊格にもこの字を用いる場合があった。一方わが国では、上記に加え、在来の「カミ」にこの文字を当てて受容する。在来の神は不可視の存在であり、時に応じて樹木（神籬）、岩石（磐座）、山林（神奈備）などに降臨すると観念された。さらに、神話に描かれる神や先祖神の存在、動物などにも神が感得されるケースがある。

※「古の御典等に見えたる天地の諸の神たちを始めて、其を祀れる社に坐御霊をも申し、又人はさらにも云ず、鳥獸木草のたぐひ海山など、其余何にまれ、尋常ならずすぐれたる徳のありて、可畏き物を迦微とは云なり… 抑迦微は如此く種々にて、貴きもあり賤きもあり、強きもあり弱きもあり、善きもあり悪きもありて、心も行もそのさまざまに随ひて、とりどりにしあれば …」（本居宣長『古事記伝』）

2. 神仏習合 — 神像成立の基盤 —

神仏習合とは、本来異質の神祇信仰と仏教に折り合

いをつけて、一体的に把握しようとするもので、理論・言説に長けた仏教の主導によってその教義体系の中に在来の神々を位置づけ、融和・集成を図ったものである。その手法は、早くインドにおいても、中国仏教の中にも見られるが、わが国ではとくに、後者の影響をうけて奈良時代に徐々に顕在化する。神前読経、神宮寺・鎮守社の建立、神への菩薩号の授与などの現象がそれで、やがて平安中～後期に本地垂迹説が成立して理論的到達点に達している。偶像崇拜の伝統のなかったわが国において、神像が生まれたのは仏像を礼拝する仏教の影響であり、古代日本におけるこのような習合化の流れに対応して、奈良末乃至平安初期に神像彫刻が出現を見た。

3. 神像彫刻の成立とその種類

中国の高僧伝には、俗形の男神を中心に、様々な在地の神に関する記事が見られる。中には、神が僧から受戒し、出家する話が含まれる。朝鮮半島においても、在地の女神信仰が三国時代に存在し、慶州にその遺例が確認される。これらの事例を、わが国の初期神像に当て嵌めると、概ね僧形神像、俗形男神像、女神像に対応する。もともと偶像崇拜の無いわが国において、神を人格神として造形化するに当たり、これらの姿形が借用されたのは自然の趨勢と考えられる。

〈神像の分類〉

僧形神、男神、女神 … 中心的な3タイプ

その他、童形神、武装神、神使形神、習合神、人物神、民間信仰の諸神など



僧形神坐像（大津市・地主神社）



男神坐像（大津市・地主神社）



女神坐像（大津市・地主神社）

4. 神像彫刻の展開

— 仏像とは異質な造形への志向 —

元來神とは人の目には見えない存在であり、神聖な靈木などを依代として降臨するという、仏とは大きく異なる觀念があったためか、神像彫刻には仏像彫刻とは異質な造形的志向が看取される。その典型が、仏像特有の完好な形姿ではなく、膝前部など身体の一部を簡素化乃至省略するものである。また、全面に鑿痕を残した荒彫像や像表面に樹皮や節を残すもの、目鼻すら省略した未完成に近い作品も存在する。さらに、簡素化の極限と言うべき神像の柱状化現象が広がりを見せる。これらの特徴は、神像成立期の比較的早い時期、概ね10世紀から認められ、中世以降も広く行われている。こうした神像造形の特殊性を引き継ぎ、その延長上に位置づけられるのが近世の円空作品と言える。

5. 神像と肖像のあわい

わが国には、人を神として祀る人靈奉斎社が数多存在する。これらを二つの類型に分けると、一つは、藤原鎌足(多武峰)の様に特定氏族の祖神として子孫によって奉祀されるタイプ、いま一つは、菅原道真(天満宮)の如く、恨みを残して非業の死を遂げた故人の靈を慰め、その恨みが祟りとして発現しないよう奉斎する御靈信仰的なタイプとなる。両者はもともと、本人の意志とは無関係に後世の人たちによって祀られたものだが、近世初頭には、本人の遺志によって没後間をおかず神となった豊臣秀吉・徳川家康のケースが出現する。これ

が一種の転機となり、武将の神格化とその肖像=神像の造像が広く行われるようになる。

おわりに

神觀念は時代によって大きな違いがあり、変遷を遂げてきた。神仏関係もまた然り。こうした中から、様々な神像(神仏習合像)が生み出されてきた。造形作品を、造形・美術の問題のみに収斂させることなく、それらを通して信仰のありようを考えてゆく必要がある。神はいまも増殖しつづけている。



柱状化した神像(近江八幡市・日牟禮八幡宮)



天神像(部分、高島市・個人)

天台の中の神と仏 — 山王信仰の諸相 —

滋賀県立琵琶湖文化館 度邊勇祐

比叡山に延暦寺が創建されて以降、地主神を「山王」と称し、天台の護り神、主神として位置づけていく。この神仏習合現象を山王信仰と呼ぶ。

その過程で、比叡山東麓に所在する日吉社（現・日吉大社）も仏教化し、天台宗の隆盛とともに祀る神も増加、さらに諸国に天台宗寺院を建立されると、あわせて鎮守の神として山王の神が勧請されるなど、全国的な山王信仰の広がりをみせる。こうしたなかで数多の神仏習合美術（山王曼荼羅、懸仏、神像など）が創作された。

しかし、明治の神仏分離、それに端を発する廃仏毀釈の運動から、日吉社の仏教色は排除されて現在に至るのである。

1. 古の比叡山

天台宗の開祖・最澄（767～822）が入山する以前の比叡山はどのような場所であったのだろうか。『古事記』には、「（前略）…大山咋神。またの名は山末の大主の神。この神は近淡海の国の日枝の山にます。また葛野の松尾にます、鳴鑼をうちたまふ神ぞ。…（後略）」とある。ここでは「日枝の山」（比叡山）に大山咋神という神が鎮座し、葛野の松尾（松尾社）と同神であるとしている。さらに奈良時代に編纂された漢詩集『懷風藻』には、「近江は惟れ帝里、禪叡は寔に神山。山静けくして俗塵寂み、谷閑けくして真理専にあり。於穆しき我が先考、独り悟りて芳縁を聞く。宝殿空に臨みて構へ、梵鐘風に入りて伝ふ。…（後略）」との一節があり、比叡山を「神山」と表現し、くわえて「宝殿空を臨みて構へ、梵鐘風に入りて伝ふ」とあるように、寺院が存在していたことをうかがわせる。

このように比叡山は、延暦寺開創以前より神が宿る「神山」であって、奈良時代には寺院も建立されていたことが推察される。通説では、在来神である大山咋神（小比叡神）が鎮座し、大津宮建設に際して大和国三輪山より大三輪神（大比叡神）が勧請されたとする。ただし、「山王」という文言や概念を見出すことはできない。

2. 天台の名僧と山王

では、何時ごろから山王という文言が確認されるのであろうか。それは、最澄が入唐求法より帰国した後の著

作のなかで初めて確認される（『弘仁九年比叡山寺僧院等之記』）。

そもそも山王とは、最澄が学んだ中国天台山において祀られた神仏「山王元弼真君」に由来するもので、最澄はこれにならって比叡山の神々を山王と称したとされる。すなわち、最澄は天台教学をはじめ密教や禅を中国より日本に持ち帰ったが、神仏関係についても大陸より移入したと考えられるのである。

山王信仰が拡大を見せるのは、第5世天台座主・円珍（814～891）の時である。というのも、円珍治山期より大比叡神・小比叡神に聖真子をくわえた「山王三聖」という概念が確認されるようになり、三社体制が成立する。さらに元慶4年（880）には、大比叡神に正一位、小比叡神に従四位上の神階が昇叙される。ちなみに、この時の大比叡神の神階は、近江国のなかでトップである。また、仁和3年（887）には円珍の上表によって、大比叡神・小比叡神に充てた神年分度者（国家に認められた神のために奉仕する年毎の出家者）が2人許可される（『日本三代実録』）。この時の円珍の上表には、「（前略）…当時の法主は大比叡小比叡の両明神なり。陰陽不測。造化无為。弘誓は仏に垂ぎ、護国を心と為す。伝ふる所の真言灌頂の道、建つる所の大乗戒壇の検、祖師の創開は、専ら主神に頼る。…（後略）」（『日本三代実録』仁和3年3月14日条）とあって、円珍は大比叡神・小比叡神を「当寺の法主」と言い、また神々を天台宗の「主神」と位置づける。このように、円珍治山期に「山王三聖」が成立し、名実ともに天台宗の護り神、主神へと展開するのである。

次に、山王との関わりにおいて重要な人物が第15世天台座主・良源（912～985）である。良源は、天皇や摂関家の援助を得て、荒廃した比叡山の堂舎などを次々に復興した天台中興の祖といわれる人物である。この時、堂舎の復興とともに山王三聖を祀る社殿を新造し、さらに地主三聖祭（後の山王祭）の規模を拡大した（『天台座主記』）。また、延暦寺僧総員に季節ごとの山王への読経参修を義務づけ、懈怠不参の者を厳しく処罰するなど、山王信仰に拠った山内統制をはかった（『慈恵大僧正伝』）。

3. 神威の高まり

保延3年（1137）の年記をもつ日本最古の起請文、長浜市塩津港遺跡出土の52号木簡には、誓約する神の名が天部の神から日本の八百万の神まで列記されている。そのなかには「当国鎮守山王七社」という記載があり、平安時代末期には山王三聖体制から山王七社体制へと山王信仰が拡大・発展しただけでなく、近江国の守護神

として信仰されていたことをうかがわせる。

そして、上記の木簡が製作された時期と同じくして、これらの山王の神々に拠った山門強訴という現象が頻発する。山門強訴とは、延暦寺の僧侶や日吉社の神人たちが自らの拠り所とする山王の神々の神輿を都に動座するなどしてその神威を誇示し、朝廷や院に対して自らの訴えや要求を突きつける行為のことで、もし、その訴えや要求を

拒否したり、また動座を邪魔するなどした場合は、神罰、仏罰がくだるとして大変恐れられた。このため、当時の朝廷や公家の人々は直接対峙することを避け、強訴の現場に武士を投入する。この山門強訴を題材とした近世絵画が琵琶湖文化館にある。それが「山法師強訴図」屏風である【写真1】。

本来、この屏風は一双(2つで1セット)を為すもので、もう一方は延暦寺が所蔵している。延暦寺本には比叡山を京都方面へ下り、賀茂川を越えて入洛する神輿2基と、それを担ぎ囲う武装した大衆たちが描かれている。琵琶湖文化館本はその続きで、向かって右側から武装した大衆たちが神輿を奉じ、門前を警護する武士たちと向かい合う緊迫した場面が描かれている。

延暦寺以外にも、例えば、奈良の興福寺では春日大社の神木を動座して強訴が行われたように、多くの大寺院が自らの要求を訴えるための闘争手段として、また神仏習合の思想に基づく行動として、強訴は頻繁に行われた。

4. 山王曼荼羅の世界

奈良時代には「神身離脱」(神は我々と同じく迷える存在で、仏に帰依する)や「護法善神」(神は仏教、寺院を守護する)といった神仏習合思想が展開するが、平安時代になると、この世の神は実は衆生済度のために示現した仏である、という「本地垂迹」説が登場する。この本地垂迹説は天台教学のなかで理論化され、積極的に宣揚された。そして、平安時代末期になると個々の神の本地仏が定められるようになり、山王七社の神々についても【表1】の通り、本地垂迹関係が定められるようになる。

旧社名	現社名	本地仏
大宮(大比叡神)	西本宮	釈迦如来
二宮(小比叡神)	東本宮	薬師如来
聖真子	宇佐宮	阿弥陀如来
八王子	牛尾宮	千手観音菩薩
客人	白山宮	十一面観音菩薩
十禅師	樹下宮	地藏菩薩
三宮	三宮宮	普賢菩薩又は大日如来

【表1】山王七社の本地垂迹



【写真1】山法師強訴図(部分・琵琶湖文化館蔵)

そして、この本地垂迹説に基づいて描かれた宗教画を垂迹画、ないし垂迹曼荼羅といい、山王の神々を描いたものを山王曼荼羅という。

そのうち代表的な山王曼荼羅が、湖東三山のひとつとして知られる百済寺(東近江市)に伝わる重要文化財・日吉山王神像(日吉山王宮曼荼羅図)である【写真2】。本図は鎌倉時代の作品で、背景に日吉社境内を描き、山王七社の神々を実際の社殿配置にほぼならって、円相になるように本地仏の姿で描く。

これを一例として、近江発祥の神仏習合・山王信仰にまつわる神仏習合美術は、近江の宗教文化を特徴づけるものとして、今も県内各地に受け継がれているのである。



【写真2】重要文化財 日吉山王神像(百済寺蔵)

【写真提供】滋賀県立琵琶湖文化館

神と仏が融けあう現場 1

龍王寺

竜王町川守

龍王寺は、行基開基伝説を伝える天台寺院で、古くは雪野寺とも呼ばれていた。この名前の由来は龍王寺の背後に聳える雪野山に由来する。雪野山は別名竜王山とも呼ばれる。また、南に聳える山も竜王山で、二つの竜王に護られた町であることから、竜王町の名前が生まれた。龍王寺の本尊は平安時代に生まれた薬師如来で、旧暦の8月15日に勤行される喘息封じの「へちま加持祈祷」には多くの人達が参拝する。

龍王寺の寺伝によれば、“昔、吉野の「小野時兼」という美貌の青年が病を癒すため、龍王寺の薬師如来の元に身を寄せた。そこに絶世の美女「三和姫」が現れ、何時しか二人は夫婦となった。しかし、ある日三和姫は、「実は私は人間ではない。雪野山の向こう、平木の御澤池に棲む者である。縁あってあなたと結ばれたが、池に戻らなければならない。形見にこの玉手箱を残すが100日間開けてはならぬ。もし私に会いたくなったら私の本体を見せよう。」と言って立ち去った。時兼は三和姫恋しさに御澤池に行くと、三和姫は10丈の大蛇となっ



龍王寺霊鐘

て現れた。驚いた時兼が形見の玉手箱を開けるとそこには梵鐘が入っていた。以来、この鐘を鳴らすと必ず雨が降る”この梵鐘は今も「龍壽鐘殿」に吊されているが、その竜頭には常に晒しが巻かれている。この晒しを解くと必ず雨が降るといふ。

とりとめのない寺伝であるが、龍王寺の薬師如来の元に、御澤池の神である三和姫が訪れ、ここに雨をもたらす梵鐘を残した。梵鐘に雨を降らす能力はないから、雨をもたらすのは三和姫、すなわち水に司る神である。現在も龍王寺では、梵鐘に御幣を捧げ祀っている。僧が撞く鐘の音は、神の発する雷鳴と重なる。

神と仏が融けあう現場 2

観音正寺

近江八幡市石寺

観音正寺は、聖徳太子開基を伝える観音霊場として、多くの参拝者が訪れる名刹である。石寺からの参道を上って参拝すると気付かないが、五個荘側からの林道を利用し、駐車場から本堂にむかって歩く途中に石の鳥居が目に入る。鳥居の下には石段があり、傍らに「おくのいん」と刻まれた石票が立っている。ここが観音正寺の奥の院へ向う参道である。

この石段を上り詰めるとテラス状の広場に出る。寺の奥の院であるから堂があるだろうと思ひ、周囲を見渡すと、思わず息を呑む光景が目飛び込む。そこには堂はなく、代わって巨磐が折り重なり、覆いかぶさるように迫ってくる。この磐の重なりが観音正寺の奥の院なのである。磐に近づく。磐の重なりは、妙にエロチックな洞穴を造り、その入り口には御幣が突き刺されている。しかし、この洞穴の中には何もない。この磐が、観音の宿る奥の院なのであるが、これはどうみても、この洞穴をカミの依り代として祀る「磐座信仰」の聖地に他ならない。

洞穴を参拝するとその側壁に、平安時代の作ともさ



観音正寺奥の院

れる仏像群がレリーフされているのに気づく。磐座に対する信仰は「カミ」に対する信仰であるが、それに祈る者は、ここでは仏教者である。仏教者にとって祈りの対象は「仏」であるから、この磐の中に仏の姿をしたカミを見出し、これを刻んだのだろう。やがて岩の中の仏は、磐を抜け出し、やや離れたところに本堂を構え、千手十一面観音の姿となり、人の祈りを受けることになる。

そして、山麓では奥の院の里宮として「奥石神社」が鎮座する。奥の院は観音正寺の聖地ではあるが、山麓の人間は、叡山に宿る神の依り代として認識し、磐に宿る神を迎えるため、神社を造営したのである。

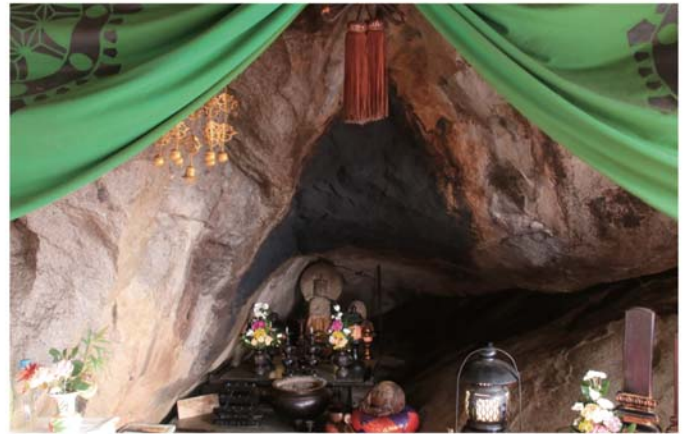
神と仏が融けあう現場 3

北向岩屋十一面観音 東近江市猪子

徹山の山並みの北に、北向岩屋十一面観音と呼ばれる堂がある。聖徳太子の開基伝説を持つ善勝寺の奥の院にあたり、坂上田村麻呂が信仰したという伝説も持っている。本尊は石造の十一面観音で、時代は判然とはしないが、江戸時代に刻まれた方と推定される。この本尊を安置する堂は、巨大な磐に張り付くように建立されている。

御本尊にお参りすべく、堂に参入する。すると、そこには仏式の本尊安置とは全く異なる、異様な空間広がる。観音正寺奥の院のように、巨巖の重なりにより生まれた洞穴があり、その中に愛らしい十一面観音像が安置されている。ここで、盛んに護摩が焚かれていた時代があったのであろう、洞穴の上部は真っ黒に煤けている。

十一面観音は仏教の尊格である。しかし、この聖地の在り方は、どうみても磐座に宿るカミに対する信仰である。堂を出ると眼下には街並み、大中の湖の干拓地、琵琶湖、そして比良の山並みまで一望することができる。と、いうことは、麓の広い範囲からこの岩屋を拝する事ができる。岩屋に宿るカミは、この広がる空間に対し、恵



北向岩屋十一面観音

みをもたらす存在として、信仰され続けてきたのであろう。この事を裏付けるように巨巖には「福丸大神」「豊盛大神」等、プライベートな神の名も刻まれている。

では、何故十一面観音がここに迎えられたのか？それは、この岩屋の形状が、女性の胎内を連想させる形状だったからであろう。岩屋を神の依り代として拝しても何ら不都合はない。しかし、より「祈った感」を満足させる為には、岩屋の形状から連想される女性神を可視化させた方が説得力がある。無論、十一面観音は菩薩であるから「性」はない。しかし、祈る一般民にとって、十一面観音は、美しく優しい母性の女神である。

神と仏が融けあう現場 4

十二相神社 多賀町佐目

十二相神社は、多賀町佐目の犬上川を見おろす高台に鎮座する。社殿の周囲には、樹齢500年とも1000年とも言われる杉の巨木が天を衝いて聳え立ち、見事な聖地空間を形成している。祭神は「少彦名命」を祀る。その創始は明らかではないが社伝に拠れば“昔、佐目の住人が大和の十津川の畔を歩いていると、川中に光り輝き薫香を放つ霊木を見つけた。驚き拝すると「我を佐目に持ち帰り祀れ」という託宣を受け、是を当地に祀ったのが十二相神社である”この霊木と少彦名命との関係は明確ではないが、「川という水界から寄り来たる神」とすれば、出雲神話に登場するこの神の性格と符合する。

「十二相」の名称についても何も語られないが、少彦名命の本地仏が「薬師瑠璃光如来」であることに結びつけて考えれば、謎を解く糸口が見えてくる。薬師瑠璃光如来は東方浄土に棲み、太陽の運行を司ることにより、時の輪廻・命の輪廻を支配する神となる。よって、一日の象徴である日光・月光菩薩を、月・年・暦の象徴である十二神将を従えて登場する。この、時の流れの循環



十二相神社

を示す十二が神社の名の由来となったのではないだろうか。さらに、薬師瑠璃光如来は修行中「十二の大願」を満足させる事を誓った、とされている。ここにも十二が登場する。また、神社の祭礼に献じられる灯明の数も十二である。これは、湖北の「オコナイ」において、本尊の薬師如来に、十二の灯明を献じることと共通する。オコナイの薬師如来は、太陽の運行を司る神として意識されているから、最も太陽の力が衰える冬に奉祀される。

明確な文献的な裏付けとか、伝承があるわけではないが「十二相」と言う変わった社名の裏側には、神と本地仏との密接な関係が潜んでいるように思える。



鈴鹿山麓混成博物館

鈴鹿山麓にある博物館が中心となり、
様々な機関と連携しながら、
歴史文化遺産を社会資源として活用することを目的に
2018年に結成された団体です。

〈構成団体〉

東近江市博物館

（能登川博物館）

（近江商人博物館）

（中路融人記念館）

（西堀榮三郎記念探検の殿堂）

愛荘町立歴史文化博物館

多賀町立博物館

一般社団法人東近江市観光協会

一般社団法人愛荘町愛知川観光協会

一般社団法人愛荘町秦荘観光協会

一般社団法人多賀観光協会

竜王町観光協会

一般社団法人近江八幡市観光物産協会

琵琶湖汽船株式会社

滋賀第一交通株式会社

〈事務局〉

多賀町立博物館

〒522-0314 滋賀県犬上郡多賀町四手976-2

tel. 0749-48-2077

e-mail museum@town.taga.lg.jp

〈発行〉

2019年2月24日

鈴鹿山麓混成博物館

